

聖嶽洞穴

HIJIRIDAKI CAVE

リーフレット 1999

日本列島における更新世人類化石は、これまで十数ヶ所の発見例があります。聖嶽洞穴は、旧石器と人骨が同じ包含層から出土した唯一の事例として、貴重な遺跡です。



ひじりだき
 みなみあまべ、ほんじょう うつつ
 聖嶽洞穴は、大分県南海部郡本匠村大字宇津津、番匠川支流の北岸、絶壁の上部に開口している鍾乳洞です。標高は約240mで、谷底との比高は約190mあります。

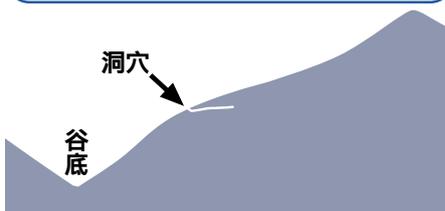
1961年(昭和36年)に本匠村教育委員会によって人骨片の所在が報告され、別府大学文学部が中心となって基礎的な調査を行い、1962年11月7日～15日に日本考古学協会洞穴遺跡調査特別調査委員会活動の一環として、賀川光夫(別府大学)を調査責任者として本格調査が行われました。

今回、37年ぶりに行われる調査は、文部省科学研究費特定領域研究の「日本人および日本文化の起源に関する学際的研究」考古学班の活動の一環として「聖嶽洞穴発掘調査団」を組織し、平成11年度に行うものです。

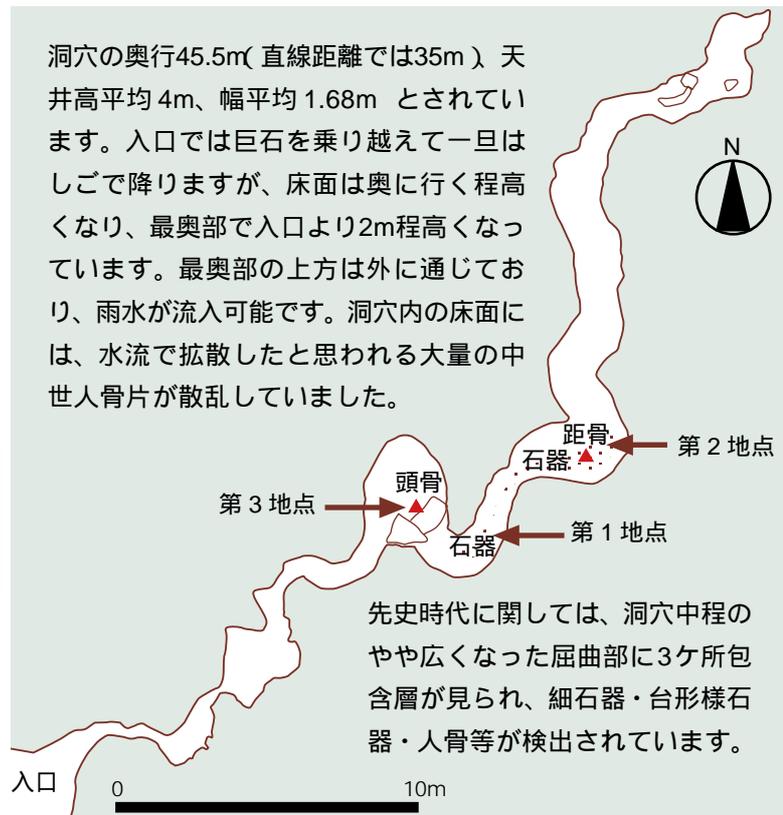
発掘調査：1999年12月10日～24日



本匠村の中心部から1km程北西
 谷底から洞穴まで直線距離で約310m、谷底との比高は約190mですから、平均斜度は30度を越えています。



洞穴の奥行45.5m(直線距離では35m)、天井高平均4m、幅平均1.68mとされています。入口では巨石を乗り越えて一旦はしごで降りますが、床面は奥に行く程高くなり、最奥部で入口より2m程高くなっています。最奥部の上方は外に通じており、雨水が流入可能です。洞穴内の床面には、水流で拡散したと思われる大量の中世人骨片が散乱していました。



先史時代に関しては、洞穴中程のやや広くなった屈曲部に3ヶ所包含層が見られ、細石器・台形様石器・人骨等が検出されています。

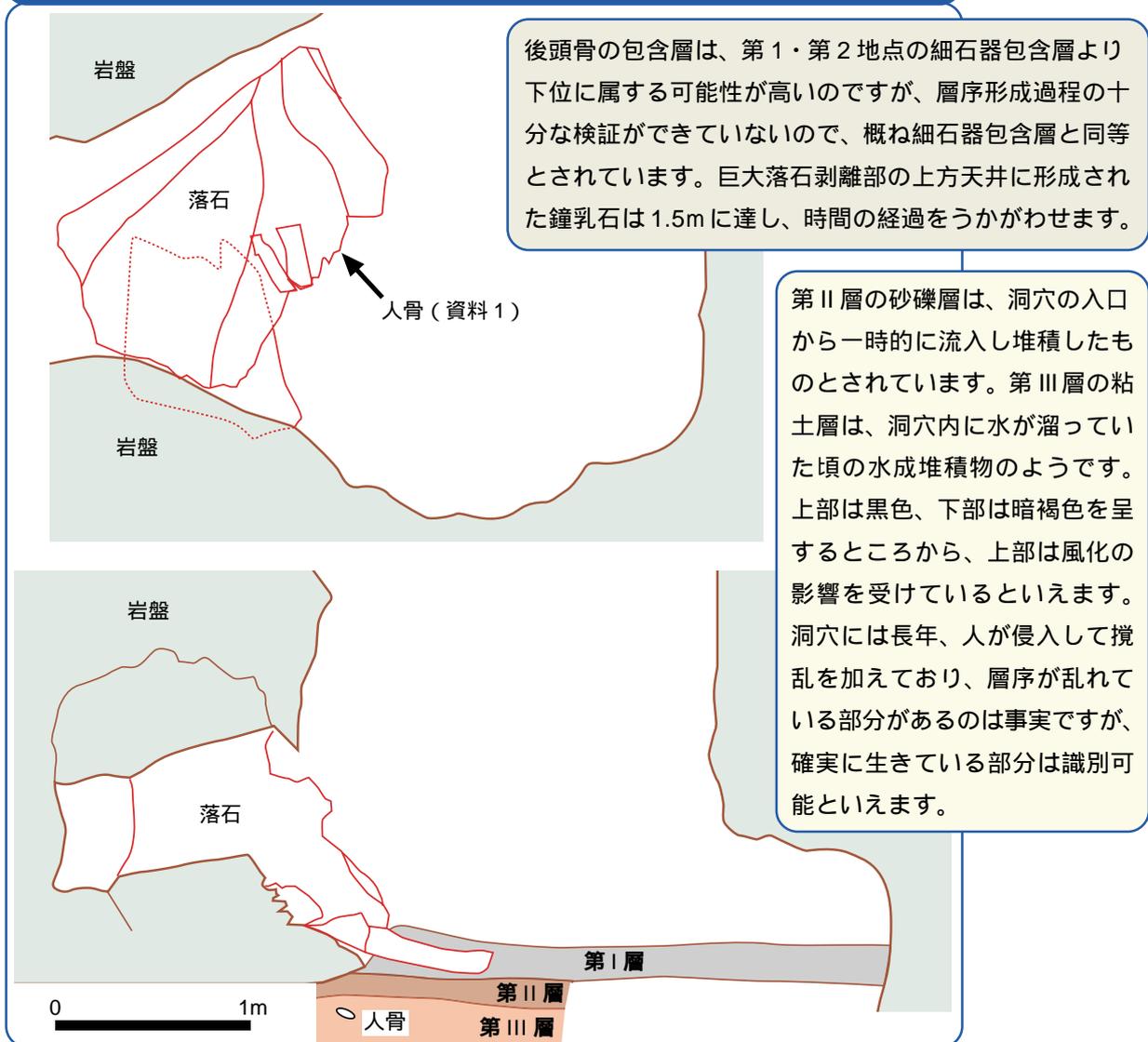
洞穴内の基本層序

- 第Ⅰ層 黒色土層 (10 ~ 15cm) 宋銭・金属片・土器片・人骨
- 第Ⅱ層 粘質軟砂礫層 (15 ~ 25cm) 無遺物層
- 第Ⅲ層 粘土層 (2m 以上 ~ 未確認) 上層がやや黒色、Ⅱ層とⅢ層の境目が細石器の包含層

旧石器時代包含層の状況

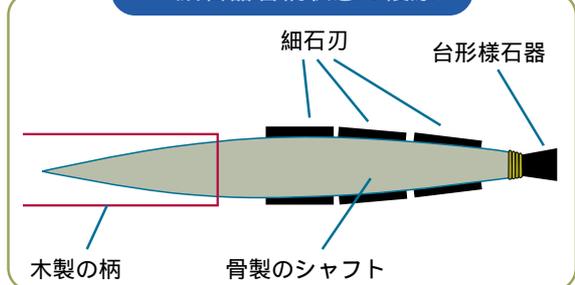
- 第1地点 (第Ⅲ層上面出土)
細石核、細石刃
- 第2地点 (第Ⅲ層上面出土)
台形様石器、石核
ヒト距骨、ヒト腰椎、加工人骨? 2点 (尖頭状に加工された脛骨、ヘラ状に加工された橈骨)
- 第3地点 (第Ⅱ層形成中の巨大落石の下、第Ⅲ層上位出土)
ヒト後頭骨 (資料1)、ツキノワグマ左尺骨片、(やや離れて) ヒト頭蓋骨小片 (資料2)

後頭骨出土地点 (第3地点) 平面図 / 断面図 (賀川 1967 より)



なお第Ⅰ層人骨と第Ⅲ層人骨 (資料1と資料2) のフッ素含有量は各々0.20%、及び0.56% (資料2は0.55%) でしたから、その差は歴然としています。特に資料1は層序的にも確実なものとされています。また資料2は小片ながら各種の特徴は資料1と同類のもので、第Ⅰ層人骨の中に同じ特徴を持つものは全く見出すことができないので、資料1と共に扱ってよいようです (同一個体)。

細石器着柄状態の復原

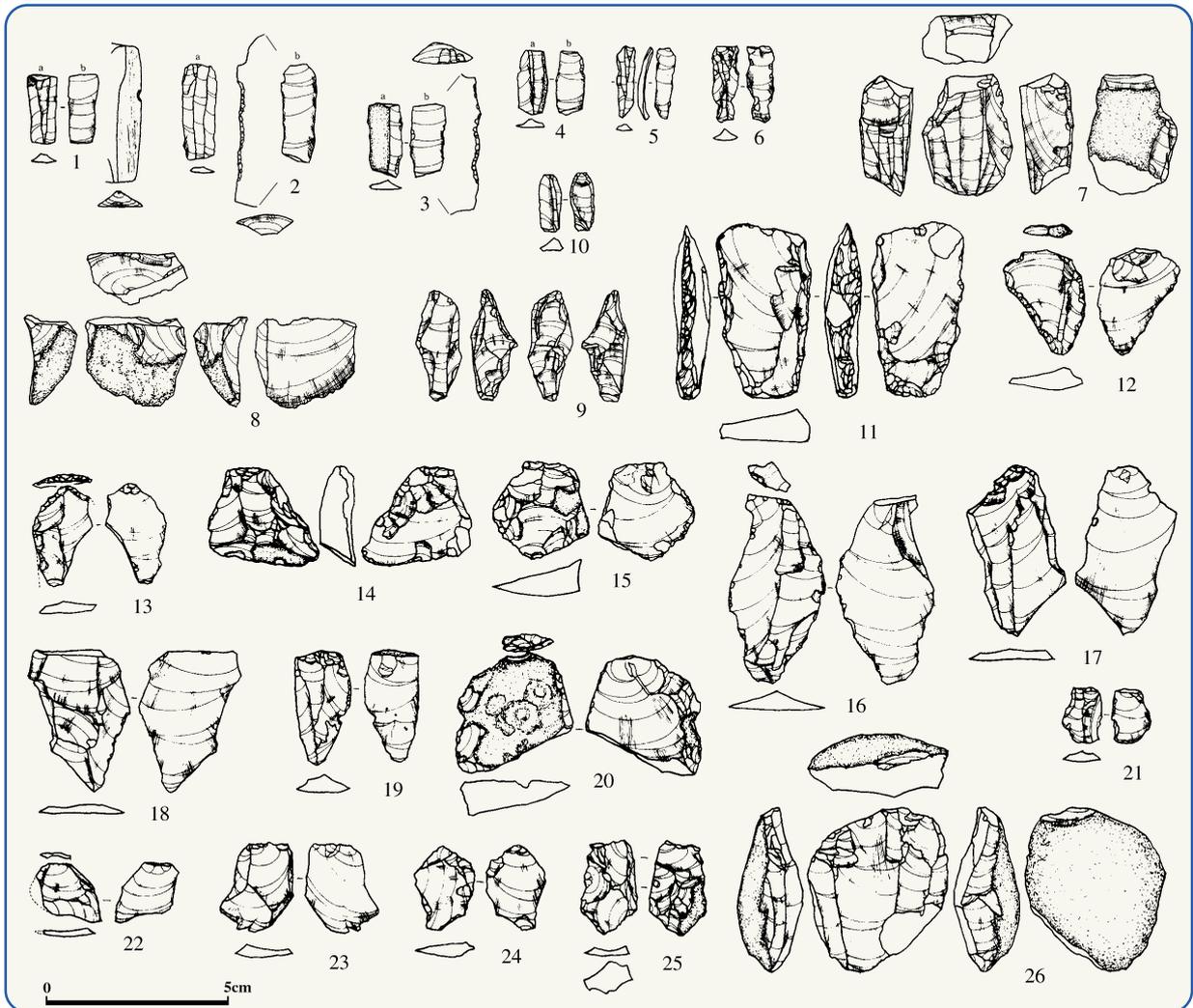




頭頂骨・後頭骨ともにラムダで12mm厚、頭頂骨全体の平均では11.5mmときわめて厚く、長頭型で、全体に古い形質を持ち、縄文人には似ていません。壮年ないし熟年期の女性と推定されます。後頭隆起の形状は、むしろクロマニヨン1号人や周口店上洞人101に類似しています。



聖嶽洞穴出土の石器 (橋 1981 より)

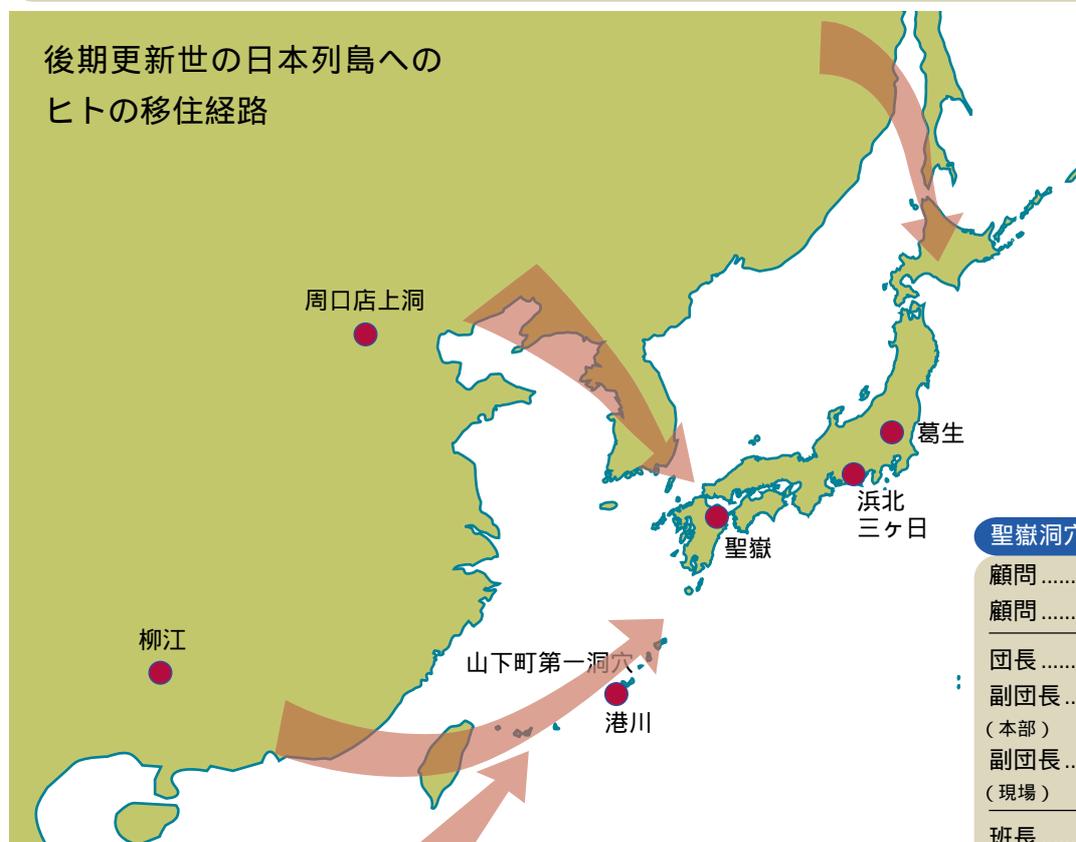


全て良質の黒曜石で、腰岳産(肉眼観察)と考えられます。細石刃、細石核(7)は第1地点、台形様石器(11)、小石核(26)は第2地点の出土なので、あるいは時期差を示すかもしれません。東九州の後期旧石器は流紋岩、チャートが主体ですし、台形様石器の存在を含め、これらの資料は特異なものといえます。

日本列島周辺の後期更新世人類化石出土遺跡

遺跡名	所在地	調査	年代(数値は較正前 ¹⁴ C年代)	出土人骨	出土遺物
山下町第一洞穴	沖縄県 那覇市	1962 ~ 69	およそ 32,000	大腿骨・脛骨(7歳位)	石器?
ピンザアブ洞穴	沖縄県 宮古島	1982 ~ 84	およそ 26,000	数個体 / 後頭骨・頭頂骨・脊椎・乳歯	
港川	沖縄県 具志頭村	1968 ~ 70	16,600 ± 650、18,250 ± 230	4個体ないし9個体分	
大山洞穴	沖縄県 宜野湾市	1964	後期更新世の後期	右下顎骨片 1	
桃原洞穴	沖縄県 北谷町	1966	後期更新世の後期?	頭蓋骨片 1	
カダバル洞穴	沖縄県 伊江島	1935 ~ 62	後期更新世の後期?	頭頂骨片 1	礫器?
ゴヘズ洞穴	沖縄県 伊江島	1976 ~ 77	後期更新世の後期?	成人下顎骨 1	
下地原洞穴	沖縄県 久米島	1978 ~ 86	およそ 15,000 ~ 16,000	乳児骨 1個体	
聖嶽洞穴	大分県 本匠村	1961 ~ 62	細石器文化期 およそ 14,000	後頭骨 + 頭頂骨 細石器・各種剥片	
三ヶ日	静岡県 三ヶ日町	1959 ~ 61	およそ 18,000 より新しい	頭骨各部片・寛骨・大腿骨	
浜北	静岡県 浜北市	1960 ~ 62	およそ 14,000、及び 18,000	前頭骨 + 頭頂骨・上腕骨・寛骨	
葛生	栃木県 葛生町	1951	後期更新世の前期?	大腿骨 2・中手骨・尺骨	
周口店上洞	河北省 房山県	1933 ~ 34	およそ 1 ~ 2 万年前?	少なくとも 8 個体分	
柳江	広西壮族自治区 柳江県	1958	およそ 4 万年前?	頭骨・椎骨・肋骨・寛骨・大腿骨	

後期更新世の日本列島への ヒトの移住経路



聖嶽洞穴発掘調査団

顧問..... 賀川光夫
顧問..... 小片丘彦

団長..... 橘 昌信
副団長.... 春成秀爾
(本部)
副団長.... 小田静夫
(現場)

班長..... 辻本崇夫
(考古学)
班長..... 榑崎修一郎
(人類学)
班長..... 松浦秀治
(考古科学)
班長..... 河村善也
(古脊椎動物学)

本リーフレットは複数の情報源を総合して作成しました。

関連文献

- 賀川光夫 1962 「大分県聖嶽洞穴遺跡の調査」 洞穴遺跡調査会会報 4, pp.1-2.
1967 「大分県南海部郡聖嶽洞穴遺跡」 日本考古学年報 15, p.25.
1967 「大分県聖岳洞穴」 『日本の洞穴遺跡』, pp.278-283, 平凡社。
小片 保 1967 「洞穴遺跡出土の人骨所見序説」 『日本の洞穴遺跡』, pp.382-423, 平凡社。
橘 昌信 1981 「大分県聖岳洞穴出土の石器」 別府大学博物館研究報告 5, pp.15-20.
本匠村史編さん委員会・賀川光夫 1983 「聖嶽の古代人」 『本匠村史』, pp.41-53, 本匠村史編さん委員会。
国立科学博物館 1988 『日本人の起源展 - 日本人はどこから来たか』, p.48. 読売新聞社。

聖嶽洞穴リーフレット

文部省科学研究費特定領域研究(1) 課題番号 09208103 (代表: 尾本恵市)
日本人および日本文化の起源に関する学際的研究 考古学班 (研究代表者: 春成秀爾)

編集

聖嶽洞穴発掘調査団

発行

国立歴史民俗博物館春成研究室 (〒 285-8502 千葉県佐倉市城内町 117)

発行日

1999年(平成11年)12月1日